

第3章

成果・評価・展望

1. 成果
2. 評価
3. 展望

1. 成果

1. カリキュラムの開発と実施

①1年生	参照ページ
・STEP ゼミ (基礎) Political (政治学的分野) の実施	16,17
・STEP ゼミ (基礎) Societal (社会学的分野) の実施	18,19
・STEP ゼミ (基礎) Economic (経済的分野) の実施	20,21
・STEP ゼミ (基礎) Technological (科学技術的分野) の実施	22,23
・Global English (グローバル・イングリッシュ) の実施	24,25
・国際シンポジウムにおける、プレゼン発表・ポスター発表(E と P)	45,47,84
・中間発表会における、企画運営・プレゼン発表・ポスター発表(S,T と GE)	89

②2年生	参照ページ
・STEP ゼミ Political (政治学的分野) の実施	30,31
・STEP ゼミ Societal (社会学的分野) の実施	32,33
・STEP ゼミ Economic (経済的分野) の実施	34,35
・STEP ゼミ Technological (科学技術的分野) の実施	36,37
・SP (シナリオ・プランニング) の実施	38,39
・Global English (グローバル・イングリッシュ) の実施	40,41
・国際シンポジウムにおける、企画運営・SP プレゼン発表・SP ポスター発表 英語によるパネルディスカッション	46,47 70-73
・中間発表会における、企画運営・プレゼン発表・ポスター発表(SP)	71,74,75

③3年生	参照ページ
・SP (シナリオ・プランニング) の実施	42,43

2. 教材の開発	参照ページ
・各 STEP ゼミ	
・段階的 SP の手順、生徒へ参考 SP の提示	42,43
・卒業論文、英語による論文のアブストラクトの作成	卒業論文選

3. その他の活動	参照ページ
・iPad の全高1・高2 生徒への導入による、情報活用処理能力の向上	
・春期の国内外フィールドワーク	48-51
・産官学グローバルネットワークの構築 (海外4 か国5 校、国内2 校の高校生)	

4. 成果等の発信	参照ページ
・未来を考える国際シンポジウム (4 か国5 校海外生徒、2 校の国内生徒)、中間発表会 資料冊子・卒業論文選の作成だけでなく、DVD の作成・送付も	44-47 70-73,80-84
・ホームページ (行事実施毎に更新、発表会・報告書等資料の発信、英語版の作成)	

平成 29 年度（指定 3 年次）の実績 <①, ②, ③は学年を表す>

月	日	曜日	特別 講演会 授業	フュー チャー ワーク	1 年生					2 年生					内容・連携先
					P	E	S	T	GE	P	E	S	T	GE	
4															オリエンテーション(G-Mission)、5回
5	2	火	①												思考技法
6	2	金	①												P
6	13	火	①												T
6	30	金	①												S
7	11	火		①											P
7	18	火		①											アイデアとコンセプト
7	24	月		①											S
7	31	月		①											E
9	5	火	①												E
11	11	土			国際シンポジウム									4カ国の外国人生徒（10名） 生徒プレゼンテーション パネルディスカッション ポスター発表	
12	6	水		①											グローバルリーダー像
1	13	金		①											T
2	23	金			中間発表会									生徒プレゼンテーション ポスター発表	
3	14~ 17			○	理化学研究所・東京工業大学・産業技術総合研究所										
3	14~ 17			○	Google・東京証券取引所・筑波大学・アクセントチュア										
3	14~ 19			○	Colegio de San Juan de Letran (フィリピン)										
3	14~ 19			○	Le Hong Phong High School Marie Curie High School (ベトナム)										
3	14	水			2nd Electron Device Technology and Manufacturing(EDTM) Conference 2018 において、ポスター発表（3チーム）										
3	16~ 21			○	マレーシア工科大学 St. Joseph's Institution（シンガポール）										
3	24	土			SGH 甲子園										

2. 評価

1. カリキュラムの開発と実施

①1年生

STEPゼミ（基礎）、GE（グローバル・イングリッシュ）、講演会・特別授業、フィールドワークの活動は、昨年度を踏まえて内容・方法の改善が進み、安定的な実施が行われた。その結果、2年生におけるSP（シナリオ・プランニング）実施のための効果的なカリキュラム開発が行われた。

②2年生

1年生段階における活動、STEPゼミを踏まえ、「エネルギー」をテーマとするSPを実施した。それを11月の国際シンポジウムで、更に改訂したものを2月の中間発表会で発表した。

③3年生

班ごとにまとめたSPを論文として仕上げるとともに、個人執筆部分にも各自が取り組んだ。また、論文の要約をフォームに従って英文の要約（アブストラクト）として取りまとめた。これらも含めて「卒業論文集」として発刊するとともに、その「選集」を発刊した。

以上、概ね所記の目的を達成している。

2. 教材の開発

SPにつながるSTEPゼミ、講演会・特別授業、GEの内容がほぼ確立した。高校生が行うにふさわしいSP教材の開発とそのマニュアル化に取りかかり、「卒業論文選」として刊行した。

3. 成果等の発信

発表会・ホームページ（英文を含む）等を通じてカリキュラム内容や開発した教材・成果物の発信は、引き続き行われている。

4. 生徒の意識

グローバルコース生の海外への関心は高く、留学などの実際の行動にもつながっている。また、様々な能力が伸張したと感じる生徒の割合も、一般コースの生徒に比べ顕著に高い。しかし、卒業時に直接海外に進学するよりは、大学時の留学・海外研修レベルに意識がとどまっている傾向が強い。なお、高校3年生に対する調査ではグローバルコースの教育に満足を感じている生徒は93%であった。

【アンケート結果】「大いにある」「ある」と答えた生徒の割合

①海外に関する関心	GL生 73%	一般生 56%
②情報収集やプレゼンテーションなど、ICTを活用する力	GL生 71%	一般生 25%
③グループ活動での自発的な行動をとる姿勢	GL生 64%	一般生 51%
④自らの考えや論拠を整理して議論し、質問に答える力	GL生 71%	一般生 37%
⑤世界の色々な問題について興味を持ち、グローバルな視点で考える力	GL生 69%	一般生 25%
⑥グループの中でコミュニケーションを図り、目的のために協働する力	GL生 75%	一般生 40%

5. 生徒の成長

未来を考える国際シンポジウムを当初の予定より1年前倒しで実施し、SPのプレゼンやパネルディスカッションを英語で行った。この行事の生徒に与える影響は大きく、生徒の意欲的な活動の成果は勉学面でも顕著に表れている。他のコースの生徒に比べ、進学成績の面でもよい結果を残している。

6. グローバル以外の生徒への波及、校内体制

海外研修への参加者数、トビタテ！留学JAPANへの応募者数・合格者数は、グローバルコース以外の生徒でも増加している。（昨年度、全校で11名合格）また、4技能の総合的な英語力の面でもその伸びは顕著である。

一方、中学校では「プレゼン・グランプリ」が行われ、各学年の発達段階に応じた工夫により、様々なプレゼンが行われた。ここには、SGHの生徒の活動による刺激の効果が顕著に表れている。

なお、SPを通じてのネットワークの構築は、その基礎としての交流拡大段階にとどまっている。

7. 評価とその方法

本プログラムに関する定量的・継続的な評価の方法・分析については、十分であるとは言い難い状況のままである。

スーパー グローバル ハイスクール 目標設定シートより

上段	SGH 対象生徒
下段	SGH 対象生徒以外

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)

年度	25	26	27	28	29	30	31	目標値
a 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数(人)	—	—	9	22	19			160
	52	48	80	43	23			80
b 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数(人)	—	—	9	29	20			120
	19	17	30	31	25			40
c 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合(%)	—	—	72	70	59			100
		48	50	54	43			20
d 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数(人)	—	—	2	6	7			40
	7	5	21	8	5			10
e 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合(%)	—	—	15	27	27			100
	6	6	8	13	21			20
f 将来起業したいと思っている生徒数(人)	—	—	6	9	8			40
		29	40	21	13			20

1' 指定4年目以降に検証する成果目標

年度	25	26	27	28	29	30	31	目標値
a 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合(%)	—	—	—	—	—			60
	24	26						40
b 海外大学へ進学する生徒の人数(人)	—	—	—	—	—			10
	0	0						5
c SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合(%)	—	—	—	—	—			80
d 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数(人)	—	—	—	—	—			80
								50

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット)

年度	25	26	27	28	29	30	31	目標値
a 課題研究に関する国外の研修参加者数(人)	2	2	45	51	46			80
b 課題研究に関する国内の研修参加者数(人)	19	19	78	105	138			160
c 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	0	0	5	7	7			10
d 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)	0	0	22	66	40			150
e 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)	0	0	11	33	50			50
f グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数(人)	6	9	0	11	16			60
g 帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)	8	3	3	4	7			30
h 先進校としての研究発表回数	0	0	3	3	5			10
i 外国語によるホームページの整備状況	×	×	×	○	○			○
j 産官学グローバルネットワークの構築	0	0	0	7	7			50

3. 展望

1. シナリオ・プランニング (SP)

- ・1年生 (STEP 基礎、GE、講演会・特別授業・フィールドワーク)、2年生 (STEP、SP、GE、講演会・特別授業・フィールドワーク)、3年生 (SP、卒業論文、英文によるアブストラクト) という、3年間の積み上げ方式による「高校生が行う SP」の試みが一回りした。
- ・2年目の SP となったことから、前年の経験を活かして取り組んだ。すなわち、身近なテーマ「コンビニ」から開始し、最終的なテーマ「エネルギー」に近づける形をとった。
- ・論理的な思考力を高める方策として SP の実施は有効であるものの、実際に取り組む中、課題が多く発見された。
- ・英語による要約 (アブストラクト) の作成実践を行い、「卒業論文集」の最初に、すべての班の SP を紹介する「まとめ」として掲載した。

2. SP を実施する際の課題として見えてきたもの

- ・生徒の知識や思考力のなさを補完していく指導法・指導者の育成をどうするか。
- ・内容の論理性の充実・効率的な議論の構築をどのように行うか。
- ・生徒の知識や情報収集能力の差を集団的指導の中、どう解消するか。
- ・SP と STEP ゼミとの連携の問題点をどのように解決するか。
生徒は「専門的見地から意見を述べ」ようとはしているが、まだまだそこまでの知識と視座の獲得には至っていない。
- ・「議論をするとはどういうことなのか」をいかに生徒に理解させ実践させるか。
- ・SP に対する評価をどうするか。
どのような SP が「よい」「面白い」のか、の統一的理解がない。
- ・英語による要約 (アブストラクト) 指導法をどのように確立するか。

3. 全体的な課題

- ・3年間の経験により、各取り組みは「こなれて」来たが、論理的思考力の獲得という面では不十分である。プレゼンの技術・ポスター作成能力は伸長したが、議論を深める・突き詰めることは難しい。
- ・すべての教員に、SP や STEP ゼミの指導ができる知識と技術が身につけているわけではない。

4. 課題克服のため

- ・教員の研修・指導力向上への取り組みを実施する。
具体的な研修計画と目標の設定と計画の実践。
- ・学校全体として SP に取り組む体制を構築する。
中高一環教育であることを活かし、中学校段階から STEP ゼミ(基礎)につながる取り組みを、「総合的な学習の時間」の中で行う構想を具体化する。

5. 広報活動の充実と産官学グローバルネットワークの構築

- ・「未来を考える国際シンポジウム」を1年早く開始したが、その効果は大きい。その成功を踏まえて次年度は交流する高校の更なる拡大とともに、大学・企業・自治体などにも協働SPを積極的に広報・提案する。
- ・SGH活動の内容のさらなる充実を図り、SPを媒介とした産官学グローバルネットワーク構想の実現に向け、国内の自治体や企業・海外の企業や組織との連携を深める。

6. 評価

- ・外部の専門家にも参加していただいた新しい組織を設立して、評価の内容や方法について具体的な取り組みを行う。
- ・評価の方法・内容・時期を定め、計画的で客観的な評価を実施する。



